

第九回

教育相談の「ゴール」
共同体感覚を「はぐくむ」

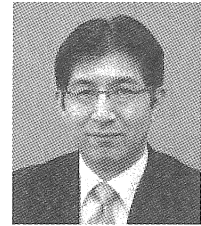
本連載もいよいよ今号を残すのみとなった。前号まで、教育相談の「心」と「技」について述べてきたが、今回はいよいよ「ゴール」、すなわち教育相談の目指すものは何かを考えてみたい。

一 共同体感覚とは

教育相談の「ゴール」を考える上で示唆を与えてくれるのは、第三回から第五回で紹介したアドラー心理学である。

アドラー心理学では、心理療法、カウンセリング、教育の目標は、すべて「共同体感覚」を「はぐくむことである」と考える。つまり、共同体感覚が精神的健康のバロメーターであり、逆に言えば、共同体感覚の欠如が、さまざまな問題行動や精神病理の原因だと考えるのである。

では、共同体感覚とはどのようなものな



あいざわ のぶ ひこ
会沢 信彦

文教大学教育学部准教授

のであろうか。アドラー自身ははっきりとは定義していないようだが、およそ、以下のような意識の総体であると考えられる。

(一) 他者や世界に対する関心

自分以外の他者や世界に関心を持ち、他者の立場に立てることである。したがって、教育相談で重要とされる「共感」は、共同体感覚の一部であると言える。

(二) 所属感

「自分は所属する共同体（家族、学級、学校、地域、国、世界……）の一部であり、共同体の中に居場所が存在する」という意識である。

(三) 貢献感

「自分の所属する共同体のために、自分には何かしら役に立てることがあり、したがって自分は共同体から必要とされる存在である」という意識である。

(四) 信頼感・安心感

(一)から(三)のような意識で満たされたメンバーから成り立っている集団や組織は、お互いが強い信頼感で結ばれているはずである。そして、そのような集団や組織はまた、「自分はここにいていいんだ」という安心感で満たされていることであろう。

(五) 協力

このような集団や組織での人間関係は、お互いが敵対し、いがみ合う競争の関係ではない。むしろ、お互いがそれぞれの持ち味を発揮して助け合う、協力の関係が築かれているはずである。

(六) 相互尊敬

なぜそのような集団や組織が信頼感や安心感で満たされ、協力の風土が築かれているかといえば、メンバーがお互いをかけがえのない大切な存在であると認め合っているからである。つまり、お互いが尊敬し合う関係なのである。

なお、アドラー心理学で指摘する「共同体」は、特定の集団や組織ではなく、それらを含みつつも、究極的には宇宙全体まで広がるような概念であるとされている。

二 学級経営を支える共同体感覚

さて、現在担任している、あるいは過去に担任した、読者の学級を思い浮かべていただきたい。

まず、子どもたち同士、また子どもたちと教師の人間関係が良好でまとまりがあり、子どもたちは毎日生き生きと学校生活を送り、問題が起こっても子どもたち同士で解決できるような、そんな学級が存在する。

一方で、人間関係がバラバラで問題行動が多く、子どもたちは攻撃的であるか生気を欠くかであり、教師の指導もなかなか受け容れられない、そんな学級も存在する。

そして、教師にとってだけではなく、そこで生活する子どもたちにとっても、前者の学級は楽しさや充実感や成長の実感に満たされているはずであり、後者の学級は息苦しさ、むなしさ、恐怖や不安などに覆われているに違いない。

私たちの目指す学級とは、まさに前者のような学級であるはずである。そして、前者の学級は、前記の(一)から(六)の条件を満たしてはいないであろうか。つまり、望ましい学級とは、メンバーの共同体感覚が高く、それらが十分に発揮されている学級である

と言えるであろう。

三 学びを支える共同体感覚

ところで、前者の学級と後者の学級との違いがほかにも存在する。それは、学業に対する姿勢である。

前者の学級では、授業に対する姿勢は肯定的かつ積極的であり、教師は授業においても大きなやりがいを感じる。一方後者の学級では、授業に対する態度は否定的かつ消極的であり、授業妨害が横行したり、反対に無反応で砂をかむような思いをしたりする。

実は、最近の研究で、学習意欲と人間関係とが密接に結びついていることが明らかとなってきた。

デシとライアン (Deci & Ryan) の「自己決定理論」によれば、私たちの学ぶ意欲が高まるのは、次の三つの基本的な欲求が満たされる時であるという。その欲求とは、①有能さへの欲求(何かが上手にできるようになりたい)、②自律性への欲求(自分で物事を決めたい)とともに、③関係性への欲求(他者と関わりたい)であるとされている。

また、森敏昭氏は、比喩的に、学びを三色の糸を折り合わせて作る織物にたとえている。その三色の糸とは、①情(なさけ)の赤い糸(学びに対する情熱＝高い意欲)、②理(ことわり)の青い糸(学ぶ対象としての学問体系＝良質な教材)とともに、③

和(なごみ)の黄の糸(学びを支えるネットワーク＝良好な人間関係)であるという。良質な学びが成立する背景にも、共同体感覚が存在すると言って良いであろう。

四 共同体感覚はぐくむ学校教育を

教育相談が目指すもの、それは子どもたちの問題解決にとどまらない。さまざまな経験を通して、子どもたち同士が良質な人間関係を体験し、そのことによって共同体感覚をはぐくむことこそ、教育相談のゴールであると筆者は考えている。

そして筆者には、このゴールは教育相談のみならず、現在の学校教育そのものの目指すべきゴールでもあるように思えてならないのだ。

九回にわたり御愛読いただきありがとうございます。ありがとうございました。